

東北復興日記



163

私は宮城県南三陸町で生まれ育ち、現在は東京都豊島区にある大正大学で教員をしています。二〇一一年三月十一日は大学院生でした。家族と連絡がとれなかった日々、走馬灯のように過ぎ去った震災後のこの五年間。東京と南三陸を往復しながら、被災地を見てきました。この三年間は、大正大学の学生と一緒に、南



大正大学人間学部准教授
山内明美さん



三陸の山海を次世代に

三陸町内の中学校での総合学習授業を展開しています。

先月二十九日に、南三陸町立志津川中学校の一年生七十四名と一緒に、五十年生の南三陸杉の伐採と、馬搬での搬出作業を行いました。写真。

三陸といえば、なによりも海のイメージが強いですが、町面積の77%が山林に囲まれており、豊かな森林資源を有しています。子供たちが、自分よりもずっと年輪を重ねている大きな南三陸杉と向き合っていることに気がついてほしいという願いから始まった

プログラムです。この日伐採した杉は、現在、地域の製材所である丸平木材で特別に乾燥してもらい、年明けにみんなで本棚をつくる予定です。この作業に先立って、十月七日に南三陸の林業者らがFSC及びCOC国際認証を取得し、持続可能な地域資源活用プロジェクトが本格的に動きだしました。FSCは山の資源管理、COCは木材の流通・加工管理の国際認証です。さらに、今月は合格できれば日本初となる、養殖漁業のASC国際認証の審査が行われました。ASC認証は志

津川湾の水質保全、養殖を行うにあたり生態系への配慮も問われるハードルの高い規定が盛り込まれています。三陸の豊かな生業を、持続可能なかたちで継承する取り組みは、南三陸の林業者と漁業者が手を取り合って展開する新しい協働プロジェクトです。南三陸の人々はいま、海や山に生かされてきた自分たちの暮らしを、どうしたらもっと良くして、次世代に継承していけるかを、真剣に考えています。

この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。